◇ 国　語

国 4－1～国 4－18 まで 18 ページあります。

第一問　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

批判的思考は証拠の確かさや推論の妥当性をしっかり吟味したうえで行われる思考である。たとえば、「太郎は風邪をひいたから、学校を休んだ」と私が断定するとき、ただそう断定するのではなく、太郎が風邪をひいたのは確かなのか、また、風邪をひいたことから、学校を休むと推論するのは妥当なのかということをしっかり吟味したうえで、とくに問題がなければ、そう断定する。あるいは、誰かが「太郎は風邪をひいたから、学校を休んだ」と主張したとき、それを鵜呑(a)うのみにするのではなく、太郎が風邪をひいたことの確かさや、風邪をひいたことから学校を休むことへの推論の妥当性をしっかり吟味したうえで、問題がなければ、その主張を受け入れる。

では、(一)証拠の確かさや推論の妥当性の吟味はどのようにして行われるのだろうか。批判的思考は、感情を排して、もっぱら理性的に考えることによって行われると見なされることが多いだろう（これを「理性主義的な見方」とよぶことにする）。感情的になると、証拠や推論が歪(ゆが)められる。したがって、感情を排して、理性的に証拠を見定め、推論を行わなければならない。そうすれば、確かな証拠と妥当な推論が得られるというわけである。

たしかに、情動が証拠や推論を歪めるケースは、しばしば見受けられる。息子が戦死したという報を受けても、母親はそれを信じることができない。息子への愛があまりにも強いがゆえに、息子の死を認めたときの絶望的な悲しみに耐えきれないのだ。たとえ息子の死体に直面したとしても、生きていると思おうとする。眼前の死体ですら、死の証拠として認めることができないのだ。あるいは、かろうじてそれを死の証拠として認めたとしても、息子の魂はどこか別の場所で別の身体に受肉して、すでに息子は蘇(よみがえ)っているのだと信じようとする。つまり、息子の死をいったん認めても、もうすでに復活しているのだと結論づけようとするのである。このように情動によって証拠や推論が歪められるケースは、いろいろなところで見られるだろう。

情動が証拠や推論を歪めるケースを目(ま)の当たりにすると、批判的思考の理性主義的な見方が正しいように思えてくる。しかし、情動は本当に証拠や推論を歪める働きしかしないのだろうか。状況にたいして適切でない情動（すなわち状況の価値のあり方にふさわしくないタイプの情動や、適度な強さでない情動）は、たしかに証拠や推論を歪めるかもしれない。しかし、状況にたいして適切な情動は、むしろ証拠の確かさや推論の妥当性をきちんと吟味する助けになる。［ア］、理性が適切

な情動に裏打ちされてはじめて、証拠や推論はきちんと吟味されるのである。具体例を挙げて説明しよう。

(三) 夫が浮気をしても、それは自分が悪いからだと考える妻がいる。妻は夫の浮気をツイキュウ(A)すると、かえって夫に見捨てられるかもしれないという強い恐怖心を抱き、それゆえ自分に魅力がないから、夫が浮気をするのだと考える。こうして夫の浮気への怒りを自分のなかで抑圧(b)する。しかし、このような抑圧がチクセキ(B)すると、やがてうつ状態となり、心に深刻な変調を来す。

この妻がうつ状態にならないようにするには、どうすればよいのだろうか。理性主義的な見方からすれば、妻は夫に見捨てられる恐怖や浮気への怒りを排して、もっぱら理性的に考慮して、夫の浮気を夫の不実の証拠と捉えるべきだということになろう。そうすることで、夫が不実の報いを受けて謝罪をするべきだと正しく推論することができるようになるというわけである。しかしはたして、このように情動を排して、もっぱら理性的に考えることが可能なのだろうか。

妻は夫に見捨てられることに強い恐怖を抱いている。この強すぎる恐怖によって、妻は夫の浮気を自分のせいにし、夫への怒りを抑圧する。このような妻が夫の不実を理性的にツイキュウできるようになるためには、情動を排するのではなく、むしろ見捨てられることへの強すぎる恐怖を適度な恐怖に変え、夫への怒りを抑圧せず適度な怒りを保つようにする必要があるのではないだろうか。このような適度な恐怖と怒りを抱くことによってはじめて、妻は理性的に考慮して、夫の浮気を不実の証拠と捉え、そこから夫が不実の報いを受けて謝罪するべきだと推論できるようになる。

理性だけでは、夫の浮気をどう捉え、どんな対応をすべきかをなかなか決められない（脳の前頭前野の腹内側部という箇所を損傷した患者は、理性の働きに問題がないのに、情動が鈍っているため、物事をなかなか決められない――その一例が神経科学者A・ダマシオの研究によって有名になったフィニアス・ゲージという人物である）。適度な恐怖と怒りがあるからこそ、浮気を不実の証拠と捉え、そこから謝罪を求めるという対応を導き出せる。理性的に考慮するためには、情動を排するのではなく、情動を適切なものにしなければならない。

理性が理性的に働くためには、適切な情動の裏づけが必要となる。理性は情動を排することによって機能するのではなく、適切な情動に支えられてはじめて、理性的に機能する。理性的だと言われる人も、けっして情動をもたないのではなく、適切な情動を内に秘めている。たしかに不適切な情動は理性の機能を歪めるが、適切な情動は理性の機能を支えるのだ。

［イ］、批判的思考には、そのキバン[c]として適切な情動が必要なのである。

批判的思考には、適切な情動が必要だとはいえ、状況によっては適切な情動を抱いてしまうと、あまりにも大変すぎて生きていけない場合もある。このようなときは、適切でない情動を抱かざるをえないだろう。しかし、それによって、状況の価値のあり方だけでなく、事実のあり方すら歪めてしまうこともあるだろう。つまり、事実すら正しく認識できなくなるのだ。このようなケースはどうすればよいのかを考えてみよう。

たとえば、息子の死に直面した母親がその悲しみが大きすぎて生きていけないとする。彼女は生きていくために、そのような悲しみを抱かないようにする。そしてそのためには、息子の死という事実を否定せざるをえない。また、妻が夫の浮気に怒りを抱くと、夫に見捨てられて生きていけないとすると、妻は生きていくために、そのような怒りを抱かないようにしなければならない。［ウ］、夫の浮気が自分のせいだという偽りの事実を信じようとする。私たちは自分の生存を可能にするのに必要な情動を抱き、そのような情動を抱くのに必要な仕方で事実を捉える。事実は結局のところ、自分の生存をいわば「背負って」捉えられ、生存に反する事実は拒否されるのである。

これに関連して、「観察の理論負荷性[iii]」というテーゼがある。これは、私たちが何らかの現象を観察するとき、その現象にかんする理論が観察に影響を与えるというテーゼである。私たちはふつう、観察が理論とは独立[e]になされ、その観察によって理論の正しさが判定されると考えるだろう。観察の理論負荷性のテーゼは、この常識的な考えとは逆に、観察が理論にもとづいて（つまり理論を「背負って」）なされ、そのため理論に反するような観察はなされないと主張する。観察は理論をただひたすら裏づけるだけであり、理論を反証する力をもたないと言うのである。これは少し言い過ぎなところもあるが、観察が理論から何らかの影響を受けることは間違いない。

たとえば、天動説を信じていれば、太陽は朝、東の空から昇っていくように見える。しかし、地動説を信じていれば、地球の自転によって、地面が太陽に向かって回転していくように見える。地動説を信じているけれども、太陽が昇っていくように見えると言う人がいたとすれば（ふつうの人はそうであろう）、その人は太陽を見るときに、地動説の信念が活性化せず、元の天動説の信念に戻ってしまうために、そう見えるのだ。地動説を信じており、その信念がきちんと活性化すれば、太陽が昇るのではなく、地面が自転によって回転するように見えるはずだ。

木や油などの物の燃焼については、今日では物と酸素との化合反応だという酸素説が採用されているが、一八世紀には「フロギストン説」という誤った説が広く受け入れられていた。この説によれば、燃える物には「フロギストン（燃素）」という元素が含まれており、物の燃焼はそのフロギストンの放出だとされる。木が燃えると、灰となって軽くなるのは、フロギストンが木から出ていったからだというわけである。

酸素説を信じる人は、物が燃えるのを見ると、そこに酸素との化合を見るが、フロギストン説を信じる人は、そこにフロギストンの放出を見る。酸素論者がフロギストン論者にたいしていくらコン[D]セツ丁寧に説明しても、フロギストン論者がフロギストン説を信じているかぎり、酸素との化合を見るようにはならない。

陰謀論についても同じことが言える。ウクライナ人の虐殺はウクライナの自作自演だという陰謀論を信じる人は、ウクライナ人が無残に死んでいる写真を見せられても、それを捏造（ねつぞう）だとして、ロシア軍による虐殺の証拠とは見ようとしない。その人はどんなに証拠を突きつけられても、陰謀論の観点からしかそれを見ないのである。

このように観察は多分に理論の影響を受ける。これと同様のことが事実についても当てはまる。自分の信じる理論にもとづいて（理論を「背負って」）観察がなされるように、自らの生存にもとづいて（生存を「背負って」）事実は把握される。つまり、生存を可能にするように、事実を捉えるのである。したがって、生存状況が変わらないかぎり、把握される事実も変わらない。生きていくために事実を誤って捉えている人に正しい事実を認識させるためには、その人の生存状況を変えなければならない。つまり、事実を正しく認識してもなおその人が生きていけるようにしなければならないのである。

たとえば、さきに述べた息子の死を認められない母親は、息子の冥福を祈り続けることに自分の人生の意味を見いだせるようになれば、息子の死に大きな悲しみを抱いてもなお生きていくことができるようになろう。そしてそうなれば、息子の死を正しく認めることができるようになるだろう。

どれほどケイ[E]ショウが鳴らされても、地球温暖化を事実として受けとめない人たちは、理性が劣っているから受けとめないのではなく、そのように受けとめれば生きていけないから、受けとめないのである。地球温暖化が事実だとすると、その人たちは二酸化炭素の排出量の削減に取り組まざるをえず、そうすると経済的に生活が成り立たなくなる。したがって、地球温暖化を否定せざるをえない。逆に、地球温暖化を事実として認める人たちは、それでも生きていけるから、認めているにすぎな

いのである。

［　エ　］、事実を正しく認識するかどうかは、けっして頭の良し悪しと関係があるわけではない。大げさに聞こえるかもしれないが、事実を正しく認識するためには、その正しい事実のもとで生存が可能でなければならない。事実を誤って認識している人にたいして、どれほど理性的な説得を試みたとしても、その人が正しい事実のもとで生きていけないのであれば、その人の認識を変えることはできない。事実を正しく認識してもらうには、その人が正しい事実のもとで生きていけるように、その人の生存状況を変えなければならない。そうしてはじめて、その人は事実を正しく認識して、批判的思考を行うことができるようになるのである。

（信原幸弘『「覚える」と「わかる」　知の仕組みとその可能性』より）

問一　傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A　ツイキュウ

①世界平和をキキュウする　②悲しみのあまりゴウキュウする
③議論がフンキュウする　④カキュウ的速やかに対応する
⑤キュウソ猫を噛(か)む

1

B　チクセキ

①赤字がルイセキする　②企業がギョウセキを公開する
③ヒッセキから人物を割り出す　④海外のチームからイセキする
⑤大学をシュセキで卒業する

2

C　キバン

①酔ってバンコウを働く　②サイバンで決着をつける
③準備はバンタンだ　④ごショウバンにあずかる
⑤ソロバンを弾く

3

D　コンセツ

①サッコンの社会情勢　②助けをコンガンする
③イコンの残る戦い　④土地をカイコンする
⑤酒宴でイッコン傾ける

4

E　ケイショウ

①旅行にショウタイする　②失恋のカンショウにひたる
③作者フショウの絵画　④カンショウ材で荷物を守る
⑤火事でハンショウを鳴らす

5

問二　空欄 ア ・ イ ・ ウ ・ エ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア　①それでは　②けれども　③もっとも　④つまり　⑤さらに　6

イ　①ところで　②しかし　③ようするに　④なぜなら　⑤ひいては　7

ウ　①ただし　②それでも　③そのため　④というのも　⑤ところが　8

エ　①このように　②ましてや　③同時に　④そのうえ　⑤もしくは　9

問三　傍線部（a）「鵜呑み」に関連して、括弧内に「鵜」が入る慣用句として適当なものを次の①～⑤の中から一つ選べ。　10

①掃き溜めに（　　）　②（　　）の真似をする烏

③（　　）が鷹を生む　④（　　）口となるも牛後となるなかれ

⑤（　　）も鳴かずば撃たれまい

問四　傍線部（b）「抑圧」、（c）「独立」の本文中の意味について、対義語として適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

（b）「抑圧」　①融合　②圧迫　③流出　④解放　⑤弛緩　［11］

（c）「独立」　①随伴　②支配　③依拠　④対立　⑤並列　［12］

問五　傍線部（一）「証拠の確かさや推論の妥当性の吟味」に関して、筆者はこれらがどのように行われると述べているか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。　［13］

①理性的に考慮するには適切な情動が不可欠であり、情動の裏打ちがあってはじめて正しく吟味できる。
②証拠や推論を主張する人物が信頼できる人物かどうかを見定め、問題がなければその主張を受け入れる。
③感情的になると証拠や推論が歪められるため、感情を排して理性的に証拠を見定めて推論を行う。
④情動を抑えすぎるとうつ状態になってしまって理性的な判断ができなくなるため、適度に情動を保つ。

問六　傍線部（二）「夫が浮気をしても、それは自分が悪いからだと考える妻」の例において、筆者はこの「妻」の推論のどこに問題があったと述べているか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

14

①夫に見捨てられることへの恐怖や浮気への怒りを爆発させ、夫の浮気について激しく責め立てるような態度をとるのは妻であっても不適切であるということ

②夫に見捨てられることへの恐怖や浮気への怒りを完全に排することができなかったため、夫の浮気が不実の証拠だというように理性的に捉えられなかったこと

③脳の前頭前野の腹内側部損傷により、理性の働きに問題がないのに情動が鈍った結果、浮気を不実の証拠と捉えて謝罪を求める対応を導き出せなかったこと

④見捨てられる恐怖が強すぎるあまり、夫を責めず自分のせいにして怒りを抑圧し、浮気した夫こそ不実について謝罪するべきだと考えられなかったこと

問七　傍線部（三）「観察の理論負荷性」を説明する例として適当でないものを、次の①～④の中から一つ選べ。

15

①天動説を信じている人にとって、太陽は東の空から昇り、西の空へ沈んでいくように見えること

②天体の動きを観察・記録した結果、太陽が動いているのではないことがわかり地動説を唱えること

③フロギストン説の時代には、木が燃焼して軽い灰になるのは燃素放出の証拠だと考えられていたこと

④陰謀論を信じている人が、ロシア軍によるウクライナ人虐殺の写真は捏造だとしか考えないこと

問八　本文の内容と合致するものを次の①～⑤の中から一つ選べ。

16

①理性的で頭が良い人は、理論から独立して精密に観察することが可能であるため、批判的思考を行うことが得意である。
②どのような状況でも、適切な情動を抱いていれば状況の価値や事実のあり方について正しく判断することができる。
③理性的だと言われる人は、理性の機能を保つために、適切か不適切かを問わずけっして心の内に情動をもたない。
④生きていくために事実を誤って捉えている人は、正しい事実を認識することさえできれば生存状況を改善できる。
⑤地球温暖化を事実として認める人は、賢いのではなく、地球温暖化を認めても生きていけるから認められるにすぎない。

第二問　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

文学に限らず芸術創造の場というものを考えるとき、近代人はどうも孤心に重点を置いて考えようとする［　ア　］があります。近代はまず個性を大事にした。個の自覚ということが重視されたのです。それに伴って、普通の人間とは違う能力を持った人間、つまり天才(一)が重視されるようになってきた。その結果一人の天才が多くの障害をコク(A)フクしつつものをつくっていく、その内面の孤独に、文学あるいは芸術評価の基本が置かれたように思うのです。

もともとこの天才という観念は、十八世紀の終わりごろ、ロマン主義(注一)という文芸思想、芸術思想の流れが発生して以来のものでして、それ以前にも天才はたくさんいたのです。が、個人としての天才を重視する風潮はさほどにはなかった。

今日の文芸理論にしても芸術理論にしても、やはりなおそういう考え方の大きな流れのなかに置かれています。たしかに孤心は、近代芸術を見る場合には有効な着眼点でしょう。しかし注意しておいていいのは、それと同じ目で古い時代のものをみて勇み足(a)を犯すことがあるということです。たとえば島木赤彦(注二)とか斎藤茂吉とかは『万葉集』をきわめて高く評価しましたが、彼らの評価は近代の芸術思想に大きく支配されていたことを否めません。(二)評価した事自体に誤りはない。しかし赤彦にも茂吉にも、『万葉集』はしょせん一面しか見抜くことができなかった。この問題は、我々に、芸術の見方について重大な反省、もしくは修正を求めているのではないかと思うのです。では孤心の他に、何か別の力学的原理があるとすれば、それは何かということになる。かくして孤心とは全く逆の、うたげという創造の場へとだんだん頭が集中していったわけです。

古い時代から、現代に至るまで、文学作品の歴史をながめる場合のひとつのポイントとして、うたげ的な世界(三)、うたげ的な場というものを想定してみると、改めてはっきりと見えてくる精神の働きがあるのではないか――今日はそういう話をいたします。

『万葉集』のなかには多分にうたげの世界があるのです。巻一と巻二は、そこを読むだけで万葉の本質は大体のケントウ(B)がつくといわれるぐらいに重要な巻ですが、そこには見られない世界がそれ以外の巻にはある。一言でいえばそれがうたげの世界、笑いの世界、批評の世界、あるいは批評どころか罵り合い、皮肉りあう人間の世界、そういう世界があるのです。

『万葉集』のうたげの世界に興味を覚えたのは随分古いことで、かれこれ二十年にもなりましょうか、大学を出た直後でした。戦後間もなくのころで、社会のあらゆる分野で様々なものの考え方が［　イ　］し、どこにいわゆるオーソドックスな考え方があるのか、どこに異端的な考え方があるのか、そういうことの見分けが全くつかない時代でした。誰も彼も滅茶苦茶になっていて、それだけでおもしろくもあった時代です。そういう時代でしたから、『万葉集』にしても自分の読みたいところを自分勝手に読んでいったのです。するとあちこちで不思議に気を惹かれるところにぶつかった。巻十六の笑いの歌がそうでした。『万葉集』というと、それまでは素直な、純一な、丈夫振りの世界とだけ教わってきていました。赤彦や茂吉らによってつくりあげられた、近代の代表的な万葉観であったのです。ところが、『万葉集』には、そういう万葉観では律しきれないものがある、ということに気づいたのです。あの時の新鮮な昂奮が、今日の「うたげと孤心」というテーマに惹かれていく最初のきっかけであったといっていいのです。

巻十六の笑いの歌とは、たとえば穂積親王の歌です。『万葉集』のなかには親王や皇子の歌が多々収録されていますが、なかには悲劇的な死を遂げた大津親王や有馬親王もいます。しかし、この穂積親王という人は、長寿を保って平穏に死んだ人でした。

(四) 家にある櫃に鏁刺し蔵めてし恋の奴のつかみかかりて

我が家には長持のような箱がある。その箱に鍵をかけ、逃げ出さないようしまい込んでおいた恋の奴は、鍵をあけ飛び出してきてはまたしても私につかみかかる。要するに、自分は美しい女を見るとすぐ恋をしてしまう、というだけの歌なのですが、恋を擬人化したところにユーモアを醸す曲があります。これを穂積親王は、宴席で酒に酔うと好んで朗唱したというのです。

また、長忌寸奥麿がいろいろな物の名を織り込んでつくった歌がやはり同じ巻十六に載っている。酒を飲みながら、目につく物の名を手当たり次第織り込んで、しかもキチに富んだ歌をつくるという遊びを、万葉人たちはしょっちゅうしていたらしい。

『万葉集』に、この種の歌は数えきれません。しかし近代人の目にはこれらはいかにもふざけている。まっすぐに詠った歌ではないという理由で、いずれもあっさり無視されてきたわけです。しかし、こういう種類の歌は『万葉集』に限らず、例は非常に多い。『万葉集』以前に成立した『懐風藻』という漢詩集には宴席で命じられ作ったという詩が数多く出ています。あるいは

狩猟に出かければみんなで野宿をする。かがり火を囲んで一時を遊ぶ。そのとき作りあった遊びの詩も少なからず入っています。当時、詩は、たった一人の個人の心で作られるというよりは、多くの場合集団のなかで生まれてきているのです。かつて一日の労働に励みながら、その苦しみをせめて軽くしようと同じリズムでいっせいに歌った。そこに歌というものの源を求めるなら、すべて合点(b)のつくところです。

近代人の高い評価を得ている柿本人麻呂でさえ、うたげの場においてさらに実力を発揮した人ではなかったかと思われるふしが十分にある。人麻呂の挽歌、特に妻をたった一人で葬る悲痛な挽歌は絶唱ですが、同時に大勢の人の前で、大勢の人のために、時の天皇に代って詠った歌がある。つまり自分自身の心というよりは、一般的なパブリックな心を代表する形での歌をいくつとなく作った。そしてそれらが人麻呂の代表作ともてはやされた。個性の叫びという近代の金科玉条だけでみていくと、こういう生き生きとした万葉人の生態、ひいては歌の命を見誤る危険があるのです。

前に書いた『紀貫之』という本のなかでも、同じテーマについてかなりのページを費やしました。紀貫之という人は、いわゆる職業歌人です。たとえ自分自身が悲しい、寂しい状態におかれているときでも、華やかで楽しい歌をとひとたび注文を受けたならその場ですぐさま注文に応じられる、自分の個人的感情をさしおいても、他人の感情になり代って詠うことができる、貫之は、そういうプロの歌詠みであったのです。貫之は、千首以上の歌を今日に残していますが、その約六割は他人の注文でつくった。天皇家をはじめ、名門貴族などが、家を新築したとする。今とは建物の構造が違いますから、どの家でも屏風をたくさん設えます。そしてその屏風に、ソウショク(D)を施すのです。絵を描いた紙を張り、それと対になるような、絵の情景にマッチするような歌を書いて貼っていく。そこに書かれる歌を屏風歌というのです。屏風歌には、一年十二カ月の四季を詠っていくといったやかましい方式があり、それはまた華やかな、相手の家にふさわしい歌風でなければなりません。

萩谷朴さんという国文学の先生が大変におもしろいことをおっしゃっています。とにかく貫之は千年も昔の人ですから、彼の書いたものがそのまま残っているわけはない。後の世の人々が写し伝えてきたものが、貫之の歌として今日に残っているわけです。その大部分は、貫之以外の人が撰んで、これこそ〝貫之全集〟であるという形に纏めておいてくれたものです。しかしその

〝貫之全集〟をはみ出た正真正銘貫之の歌というのがあるのです。これは現在三十何首ぐらいしか残っていませんが、それも日本のあちこちに、ここに一首、あそこに一首というように、何人かの手許に所蔵されています。それを合せてよく読んでみると、貫之がプロとしてつくった華やかな歌とは、およそ［　ウ　］歌ばかりが集まるのです。寂しさや、憤りや、さらには、皮肉さえもこめられた、人生観察において苦い眼差しの歌なのです。それらは、実は貫之自身が、これこそはおれの歌だと自撰しておいたものの断片ではないか、と萩谷さんはおっしゃるのです。貫之のような職業歌人の歌には、果たしてこれがそのまま彼の本音であったのかという疑念が常につきまといます。そこにこれこそおれの本心、本音だと自撰して残した歌があるとすれば、これは面白いじゃないですか。『万葉集』についていえば、個人の思いばかりでみていくとまちがえる。逆に貫之の場合は、オオヤケ[E]の歌ばかり作っていた歌人という観点だけでみていくとやはりまちがえる。

つまりうたげ的なものと、孤心的なものとの両方が、ぶつかり合い、斬り結び、葛藤している、その両方を、二つながら見つめていくと、古い時代にも現代にも、一貫して関わる同じ詩の問題に行き着くのです。

（大岡信『日本詩歌の特質』による）

注一　ロマン主義　……　十八世紀末から十九世紀にかけて展開した思想。個々人の感情を重んじて、個性の伸張、人間性の解放等を主張した。

注二　島木赤彦とか斎藤茂吉　……　赤彦は一八七六年、茂吉は一八八二年に生まれた歌人。ともに「アララギ」派に属し、『万葉集』を尊重するとともに実作でも近代短歌をリードした。

問一　傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A　コクフク

①温暖な地域ではコクモツがよく育つ　②期限がコクイッコクと迫る
③カコクなトレーニングを重ねる　④その日の事はコクメイに記憶している
⑤功績によりキュウコクの英雄となる

17

B　ケントウ

①フトウな判決に不服を申し立てる　②参道のトウロウに火がともる
③体育館から教室トウへ移動する　④化粧水が肌にシントウする
⑤ゼミでは学生同士がトウギする

18

C　キチ

①蒸気キカンシャを見に行こう　②古いコンピュータはハイキする
③現代語訳で『コジキ』を読む　④選手達の来年度の活躍をキす
⑤祖母のキジュを家族全員で祝う

19

D　ソウショク

①新作コートのハッショクは格別だ　②彼女の活躍にショクハツされた
③荒波にシンショクされた海岸　④祖父はショクミンチで暮らしていた
⑤シュウショクの少ない素朴な文章

20

E　オオヤケ

①初対面でコウインショウを受けた　②イラストレーターをコウボする
③テンコウ不順のため旅行を延期する　④セイコウウドクの生活にあこがれる
⑤コウゾクのランナーが迫ってきた

21

問二　空欄 ア ・ イ ・ ウ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア　①いわれ　②理性　③さだめ　④性質　⑤きらい　22

イ　①煩悶　②頑迷　③錯綜　④熟成　⑤背信　23

ウ　①趣の深い　②趣を共にする　③趣の妙なる　④趣を異にする　⑤趣のままの　24

問三　傍線部（a）・（b）の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

（a）勇み足　25

①人に批判されぬよう、ふるまうこと
②知識もないのに、知ったかぶりをすること
③慎重になりすぎて、おかしな判断をくだすこと
④現実を見ずに、伝聞だけで評価すること
⑤調子にのって、やりすぎたりすること

（b）合点のつく（「合点がいく」ともいう）　26

①思いがけず腑に落ちること
②理解できて納得できること
③矛盾があり理解しかねること
④多くの人が承認しうること
⑤自分の感情にそぐうこと

問四　傍線部（一）「天才」とあるが、その内容について正しく説明した文章として適当でないものを、次の①～④の中から一つ選べ。

27

①天才を重視する風潮が強まったのは十八世紀の終わりごろからだった。
②天才が障害を越えて制作する文芸や芸術作品に高い評価が寄せられた。
③近代になり個性が重視されたために天才という存在に注目が集まった。
④天才は普通の人とは違う能力を持った社会的に孤立した人間を指した。

問五　傍線部（二）（『万葉集』に対する）「彼らの評価は近代の芸術思想に大きく支配されていた」とあるが、それは具体的にどのようなことか。これに関連する内容を説明したもので、最も適当なものを次の①～④の中から一つ選べ。

28

①赤彦や茂吉たちが『万葉集』のなかにある笑いの歌や遊びの歌を高く評価したこと
②赤彦や茂吉たちが『万葉集』の歌風を丈夫振りと手弱女（たおやめ）振りとに分けて考えたこと
③赤彦や茂吉たちが『万葉集』のなかでも個人性の発露した歌を特に重要視したこと
④赤彦や茂吉たちが『万葉集』でも宴席で詠まれた歌の魅力にいち早く気づいたこと

問六　傍線部（三）「うたげ的な世界」とあるが、それを体現した詩歌とは具体的にどのようなものか。その内容を説明したもので、適当でないものを次の①～④の中から一つ選べ。　29

①労働の苦しみを軽くするためリズムをあわせて歌ったもの
②たった一人で妻を葬ったときに悲しみのあまり詠じたもの
③野宿した晩にかがり火を囲みながら作りあった遊びのもの
④酒を飲みつつ目についた物の名を織り込んでつくったもの

問七　傍線部（四）「家にある櫃（ひつ）に鑁（かぎ）刺し蔵（をさ）めてし恋の奴（やつこ）のつかみかかりて」とあるが、このような五七五七七からなる文芸を何というか。その名称として最も適当なものを次の①～④の中から一つ選べ。　30

①短歌　②漢詩　③俳句　④挽歌

問八　本文における著者の主張と一致するものはどれか。次の①～④の中から最も適当なものを一つ選べ。　31

①文学や芸術創造の場において個性を発揮することの重要性を『万葉集』や『懐風藻』を例にして説明している。
②素直で純一な丈夫振りという万葉観を作った赤彦や茂吉の業績について高く評価するよう見直しを求めている。
③自分の感情を率直に表現しないで他人の感情になり代って詠った紀貫之のような職業歌人を鋭く批判している。
④詩歌の歴史ではうたげ的なものと孤心的なものが関わりながら展開したという独自の文学史観を提唱している。